

松蔭 校長室だより

2026年 9月 2日 発行

—校長から保護者の皆様へのメッセージです—

松蔭中学校・松蔭高等学校

校長 浅井宣光

つかれた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」(マタイによる福音書 11:28)

2 学期始業式

皆さん、おはようございます。長い夏休みが終わり、2 学期の始業式を元気に迎えることができたことを共に感謝したいと思います。ご存知のとおり大きな災害が各地で発生しています。夏休み中の 7 月 28 日の熊本地震、8 月下旬には関東地方、千葉での水害、また石川、富山、福井など北陸地方の水害が発生しています。天に召された方々の御霊の平安を祈るとともに、愛する人を失った方々、被災された方々に心を寄せたいと思います。また、世界に目を向けると、先週、ネパールではヒマラヤの氷河が崩れたことによる土石流災害で 4 千数百名もの死者・行方不明者が出ているとの報道がありました。祈りをもって私たち一人ひとりの思いを現地の人々に寄せたいと思います。一方で、私たち自身も、自然災害に備えて心の準備、備蓄など備えをしておきたいと思います。

さて、皆さんはこの夏休みをどのように過ごされましたか？ 私はちょうどお盆の前後にまとまって休みがとれたので、テレビでたくさんの甲子園の高校野球を観戦しました。どの試合も、各都道府県代表の選手たちの真剣な表情とガッツあふれるプレーに感動しきりでした。決勝戦では、和歌山県代表の智弁和歌山高校が見事な逆転劇で優勝しました。

その智弁和歌山高校は、8 月 15 日の第 2 試合、3 回戦で福井県代表の敦賀気比高校と対戦しました。5 回表の攻撃終了後のちょうど正午、サイレンの音とともに選手とスタンドの観客全員で 1 分間の黙祷を捧げました。8 月 15 日は、第 2 次世界大戦が終わって 81 年目の終戦の日です。世界中で 6 千万人ともいわれる戦死者や民間人犠牲者に思いを寄せ、甲子園球場の全員が黙祷しました。試合後、智弁和歌山の主将、松本選手はインタビューに次のように答えていました。

ふだん戦争の話にふれることはなく、(黙祷は)経験したことが無い時間だった。野球がやりたくてもできなかった人達がいる。野球ができることへの感謝と頑張ろうという気持ちを誓いに込めました。

夏の全国高校野球大会は今年で 108 回目です。しかし、第二次世界大戦中の 1941 年から 1945 年の間、戦争のため中止になりました。「戦争」のために「好きな野球ができない若者たち」が現実にあったのです。思い起こせば 6 年前のコロナ禍で、甲子園は中止になり、インターハイなど全国大会もすべて中止になりましたが、このコロナ禍が引き起こしたことも戦争と似ているように感じます。

皆さんには自分が「好きなこと」「やりたいこと」がきつとあると思います。もし、それらのことが「できなかったり」「してはいけない」と命じられたりする状況が起こった場合、我慢できるでしょうか？ 辛抱できるでしょうか？ 希望や将来の夢をすべてあきらめて、「自分を犠牲にしろ」という命令を受けたとしたら、その人生を受け入れることができるでしょうか。

8 月は、終戦の日だけでなく、広島・長崎の原爆の日もあり、過去の「戦争」を振り返る報道やニュース、ドキュメンタリーがテレビやネットで報じられていました。また、今この瞬間にも、ウクライナ、ロシア、イスラエル、ガザ、イランといった「戦場」のようすがメディアを通じて映し出されています。

ニュースや歴史の授業では「戦争」という言葉をよく耳にしますが、ここで考えたいことは、「戦争」と「戦場」という 2 つの言葉の違いで。「戦争」と「戦場」。まず「戦争」という言葉は、社会科の教科書、歴史の教科書に載っています。国と国との政治的な争いです。何年に始まり、戦死者は〇〇万人で△△年に条約が結ばれて終わった、と書かれています。「戦争」という言葉だけを聞くと、何だか遠い世界の、自分とは関係がない話題のように感じてしまいそうです。「戦争」を「戦場」という言葉に変えてみましょう。するとその見え方は、がらっと変わるのではないのでしょうか。「戦場」とは具体的な場所です。その場所では、現在を生きる私たち一人ひとり同じように、神様から命を与えられ、懸命に日々を生きてきた普通の「人間」が存在していました。前日まで、笑い

合っていた家族が、一瞬にして命を奪われた場所が「戦場」です。勉強していた学校や、大好きな自分の部屋が破壊され、瓦礫の山に変わり、命を失う場所、それが「戦場」です。数字や歴史上の用語として捉えるのではなく、人間の「かけがえのないありふれた日常」が理不尽に壊され、苦しみと悲しみが一挙に迫り来る現実が「戦場」にはあります。

私たちは今、こうして安全に 2 学期のスタートを切りましたが、このことは決して当たり前のことではない、と思います。世界各地でこの瞬間に起こっている「戦場」の現実を知ると、結局「自分には何もできない」という無力感を持つこともあります。他者の痛みに関心を閉ざして「遠く離れた所に住む、自分とは関わりがない人のこと」だと無関心をよそおうことは、簡単ですし、楽なことなのかも知れません。しかし、それではだめだと思うのです。

私たちのスクールモットー「Open Heart, Open Mind」は、私たち一人ひとりにとり大切な姿勢を示していると思います。日本から遠く離れた「戦場」で苦しむ人々のニュースに触れたとき、心を開いて「戦場」にある人に心を寄せること。「どうしてこのようなことが起きるのか」「自分たちにできることは何か」について、先入観や偏見をもつことなく、思いを自由にして深く考え、学ぼうとすること。自分の目の前の人だけでなく、見えない場所にいる人々に対して、この姿勢を心のなかで少しでも実践してみようではありませんか。平和をつくる第一歩はそこから始まると、私は考えていますし、その第一歩を踏み出している人が皆さんのなかにはおられます。広島での被爆体験を直接聞いた人がいます。夏休み中には実際に広島を訪問し、平和礼拝に参加した人がいます。2 学期には「戦場」であった沖縄を訪れる人がいます。同じく「戦場」となっていたシンガポールを海外研修で訪れる人もいます。3 学期には、これまた「戦場」となっていたフィリピンで 2 週間、現地研修を行う人がいます。修学旅行や研修旅行を皆で楽しみながらも一方で、深く考え、学ぶ時間も大切にしていきたいと思います。

2 学期は 3 つの学期のなかで最も長い学期で行事も多くあり、特に高 3 の皆さんは進路決定の本番を迎えます。夏休みの生活リズムを元に戻すことはストレスになることも想像します。困ったことや悩み事、相談があれば、どうぞ信頼できる周囲の人に声をかけてみてください。私でもかまいませんので校長室に声をかけてください。

(9/1 学期始業式 校長講話より)